

令和元年度 奈良県教育長賞

「医療費」

奈良県立添上高等学校 三年 中森 公美

第一に、私は活気に満ちている。元気だ。そのうえ丈夫なので、体調が悪くなくても一度寝て起きたらすっかり元通りになる。ついでにもう一つ付け加えると、注射がとても嫌いだ。何が言いたいかというと、私はとても健康な人間だということだ。健康ということは、つまり病院に行かないということである。検診にも予防注射にも行かない私は、せいぜい家族の連れ添いくらいでしか病院に行く理由がない。

しかし、そんな私が先日、アレルギーによって病院に行かざるを得なくなった。たまに行く時でも兄妹や両親と一緒にいるので、一人で病院に行くのはこれが初めてである。保健証と診察券を持たされ、銀行に行きお金を財布に詰めて、それはもう緊張しながらも受付に行き、診察を受けた。何事もなく診察を終え、薬を受け取り、最後に会計。そう、本題はここだ。領収書を差し出されながら金額を聞いた時、私は思わず耳を疑った。それもそのはず、受付の看護師さんに言い渡された金額が二千元にも満たないという事態が発生したのだ。あの時の私の動揺と叫びたらない。「アッ、エエト、ハアイ……。」などと奇声を発して会計を済ませ、ペコペコと軽薄に頭を下げて帰った私を彼女はどう思っただろうか。というか、今となってはむしろ正常な反応だったとさえ思う。まさか診察代と薬代をまとめた金額が野口英世の二枚やそこらで済むなどと誰が考えるだろうか。一体何が起きているのだろうか。そんな疑問は、病院を出た直後に再び確認した領収書により解決した。そうだ。この世には保険というものが存在する。

国が医療費の大部分を賄ってくれているため、私たちが払う金額は全体の三割程度で済む。道理で安いわけだ。何も無しに医療費がこれほど安くなるはずがない。しかし、ならば国が負担してくれている分のお金はどこから来ているのか。考えるまでもなく、これは税金から支出されている。身近なところだと住民税、自動車税、消費税あたりが馴染み深いだろうか。税金はその三分の一ほどが私達の社会保障、つまりは医療や年金、福祉、介護などに使われている。普段は意識などしない。むしろ少なくなってほしいとさえ思う税金だが、その思恵について実はあまり把握していなかったりする。税金の種類だって調べてみればたくさん出てくるし、それらが何に使われるかも私たちは完全に理解できるとは言い難い。私たちはもっと税金を、そのまわりの仕組みを知り、さらに理解を深めていかなければならない。